

2018 年度 卒業論文

オステオパシーにおける傾聴の身に付けた物の影響

ジャパン・カレッジ・オブオステオパシー

36 期 柴垣 将大

< 抄録 >

目的

臨床において、施術順序を決定することや身体のどこに問題があるかを発見することは、施術を効率良く進めるうえでとても重要である。そこで、本研究ではそれらを決定するための一つの指針となるオステオパシーにおける「傾聴」について腕時計や硬貨を保持することで変化があるのか検証した。

方法

- 1、貴金属など身体に影響を与えそうなものを持っていない状態で傾聴を行う。
- 2、時計をつけた状態で傾聴を再度行う。
- 3、硬貨を持った状態で傾聴を再度行う。
- 4、上記1と2の比較、及び1と3の比較を行う。

比較は危険率 5%、片側検定のウィルコクソン順位和検定を実施する。

結果

時計を身に着けたり、硬貨を持った状態では、明らかに何も身に着けていない状態と比較して傾聴で引かれる方向に変化があったが、必ずしも身に着けている方向に引かれるとは限らなかった。

つまり、帰無仮説（：傾聴は何か物を所持していても影響は受けない）は、棄却された。危険率 5%、腕時計 P 値 0.0026、硬貨 P 値 0.0017

結論

上記結果から、対立仮説（：傾聴は所持している物の影響を受ける）は採択された。

つまり、臨床において、身体に影響があるものを身に着けていると傾聴が正確にできず、ひいては本来の目的である施術を効率よく進めるという目的にも支障をきたしてしまうため、そのような物、もしくは状況はできるだけ避けるべきである。

< 目次 >

1、序文	4
2、実験の方法	6
・対象	
・除外基準	
・測定方法	
・測定場所	
・使用器具	
・倫理配慮	
・統計方法	
3、実験の結果	8
4、考察	11
5、結論	12
6、謝辞	13
7、参考文献	14
8、付録	15

< 序文 >

ジャパンカレッジオブオステオパシーでの講義を受講し、興味をもったテクニックのひとつに「傾聴」がある。本論文における「傾聴」を以下のように定義する。「オステオパシー診断では手を用いて患者の身体を「聴」かねばならない。特定の組織の調子が悪いと弾性がなくなり、膜性平衡が途絶し、可動力と自動力の運動に新しい軸や軸点ができる。組織運動に注意して触診すると治療者の手が機能障害の部分へ引かれているのがわかる。その部分は他の健康な部分よりも運動が少ないためである。これは癒痕のある腹部に触れたときに感じるのと同じ現象である。癒痕の部位は周囲組織より緊張し硬直しているので、手が素早く引き寄せられるのを感じる。(バラル 1996)」

1年間のインターン研修にて、施術を始める前にクライアントに傾聴を行ったが、私の手が引かれるクライアントの身体の場合は実に様々で、施術方針を立てる上で役立つことは多かったと思われる。例えば、治療をどこから始めるかを決める手がかりとなったり、また治療が完了したと思っているときに残っている病変がないか調べる等である。傾聴を行っていく上での心構えや傾聴を実施する姿勢は、以下に倣い行った。「傾聴（全身または局部）の際には、できるかぎり受動的に受け入れる気持ちで行うのが必須である。自分自身を患者に投影しないように注意すべきである。正しく気持ちの準備をする方法として、自分の触感を患者の身体を通じて延長するのではなく（これは自動力やクレニオ・オステオパシーのときの方法である）、傾聴を行っている手が身体を引き寄せ吸収すると想像するとよい。傾聴しているときに吸息するのもよい方法である。受動的になりやすく手と身体の間誘引に集中しやすくなる。逆に、触感を延長するときには呼息するとよい。最後の助言として、傾聴の際には最初と感じた運動が正しい応答であるから、最初の運動に注意すべきである。全身傾聴では身体全体の情報を集めるよう手をただ患者に当てる。こうすることによって制限の大きい部分を感じ取ることができる。手は受動的に軟組織の緊張を探す。情報が正しく伝達されるためには、患者の身体がある程度成り行きに任せる状態で安定していなければならない。そうすればわずかな力に対しても反応して動く。仰臥位では身体を支える点が多すぎるので、起立位または坐位にて検査するのがよいだろう。しかしながら起立位では（背の低い治療者が背の高い患者を診る場合のように）治療者にとって困難な場合があるのが欠点である。

坐位では、患者は診察台から両脚をだらりと下ろして座り、治療者は患者の後方に立つ。片手を患者の頭蓋後頭頂部に、脊柱軸と同方向、または垂直に平坦に当てる。もう一方の手は何にも触れないか、または尾骨下に当てる。尾骨下に当てる場合は前腕を背骨方向に沿うようにする。(バラル 1996)」。上記の自

動力とは、「蠕動運動以外の上記の内臓運動は受動的で外因作用を受けている。しかし、内臓そのものも内因の能動的運動を所有していて、それを自動力と呼ぶ。それは内臓独自のゆっくりとしたほとんど感知できないほど振幅の小さい動きである。内臓自動力は感知できるが、熟練された触感を必要とする。(バラル 1990)」。また上記のクレニオとは、基礎（一次）呼吸メカニズムのことである。「体の5つの構成要素が相関関係にあることを記述するために、ウィリアム・サザーランド (William G. Sutherland) DO が提唱したひとつのモデル。それは次のようになる。1.脳と脊髄に本来備わっている自動運動性。2.脳脊髄液の波動。3.頭蓋内及び脊髄内の膜の可動性。4.頭蓋骨の関節の可動性。5.腸骨（骨盤骨）の間での仙骨の不随意運動。(オステオパシー総覧（下）1990)」。

しかしながら、この傾聴テクニックを行っていく中で、講義の中でいくつかの注意点も教えられた。その注意点のひとつは、患者が身体にある特定のものを身に着けていると、それに反応し、そこが患者の身体の治療する最優先場所であると誤診してしまうことである。そこで、卒業後も傾聴テクニックを自身のクライアントへ実施していくにあたり、本当にそのような誤診が起きてしまうのかどうかを自分で確かめたいと考え、研究していくことにしようと考えた。

本研究では、

帰無仮説 : 「傾聴は何か物を所持していても影響は受けない」

対立仮説 : 「傾聴は所持している物の影響を受ける」

とし、所持する物を腕時計と硬貨を用いて研究を進めていくことにする。

< 実験の方法 >

・対象

施術において傾聴を使用したことがある者
講義にて傾聴を習得した者

・除外基準

人の身体に触れるだけで、特に身体を動かしたりしないため、安全性は確保されており、除外基準は特に設定しない。

・測定方法

I、貴金属など傾聴に影響を与えそうなものを何も所持していない起立位のモデルに対し、傾聴を行ってもらう。傾聴を行ってもらう時の被験者の手を置く位置はモデルの頭頂部と胸腰移行部辺りとする。傾聴でどこに引かれるかを感じたら、その引かれた場所を伝えてもらう。その場所を記録する。

II、被験者には、モデルが身体のだこかに腕時計をつける、もしくはどこかのポケットに入れるところを見れないようにするため、反対側を向いてもらう。その間にモデルが腕時計を身に着ける、もしくはポケットに入れる。ここで改めて上記 I と同じようにして傾聴を行ってもらい、その場所を伝えてもらい記録する。

III、再度被験者には、モデルが硬貨を持つ、もしくはどこかのポケットに入れるところを見れないようにするため、反対側を向いてもらう。その間に私が硬貨を持つ、もしくはポケットに入れる。ここで改めて上記 I と同じようにして傾聴を行ってもらい、その場所を伝えてもらい記録する。

・測定場所

ジャパンカレッジオブオステオパシー 2 階教室

・使用器具

腕時計（メーカー（CASIO）、型番（3798 EFA-116）、重量（142g）
素材（ステンレススチール）

硬貨（日本の全硬貨（500 円、100 円、50 円、10 円、5 円、1 円）、重量（25g）

・倫理配慮

本研究への参加は被験者の自由意思によるものとする。また研究同意後においても、被験者はその理由を述べることなく本研究から自由に離脱する権利を有する。

・統計方法

本研究はサンプル数 n が少数のため、ノンパラメトリック検定となり、また同一人物での前後比較を行うため、ウィルコクソン順位和検定を使用する（危険率 5%、片側検定）。

実験結果を数値化するため、下記のようにポイントを設定

- ・測定方法 I で引かれた場所を 0 ポイントとする
- ・測定方法 I で引かれた場所を基準として身体を上下と左右に分ける
- ・測定方法 II、III で I と引かれた場所が異なっていたら +10 ポイント
- ・測定方法 II、III で上下で腕時計や硬貨を持っている方向へより引かれる方向へ近づいていたら +10 ポイント、さらに同様に左右でも近づいていたら +10 ポイントとする。
- ・つまり、測定方法 II、III で腕時計や硬貨の場所を正確に指示していれば +30 ポイントということになる
- ・I と II、III で引かれた場所に差がなかった場合は 0 ポイントとする

< 実験の結果 >

サンプル数 $n=11$

測定方法 I と II で危険率 5%、片側検定のウィルコクソン順位和検定を実施したところ有意な差異が認めれた。

測定方法 I と III で危険率 5%、片側検定のウィルコクソン順位和検定を実施したところ有意な差異が認めれた。

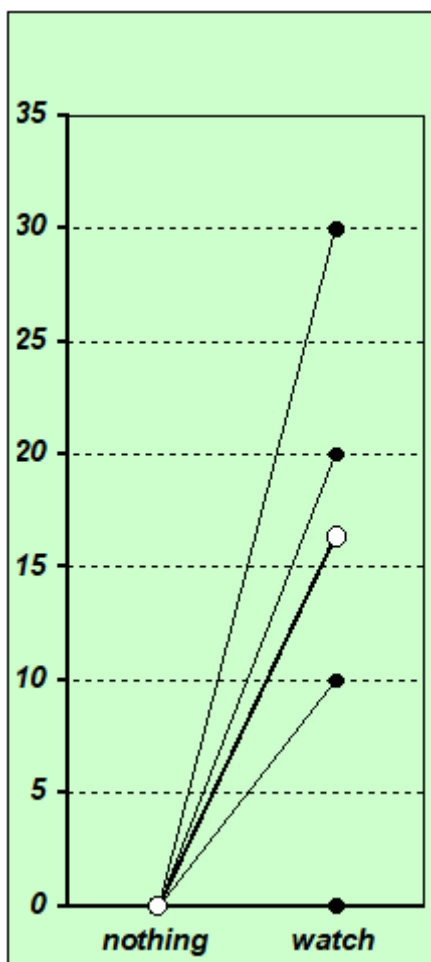
サンプル数 $n=11$ が少数であった点は本研究の制約となった。

なお必要な標本サイズは以下のようにして算出した。

- ・有意水準 : 5%
- ・標準偏差 : 腕時計 7.07 (最初の 4 データで算出)
硬貨 10.00 (最初の 4 データで算出)
- ・関心をもつ差 : 10 (引かれる場所が変化する値)
- ・標準差 : 腕時計 1.4
硬貨 1.0
- ・必要な標本サイズ : 腕時計 30 データ
硬貨 50 データ

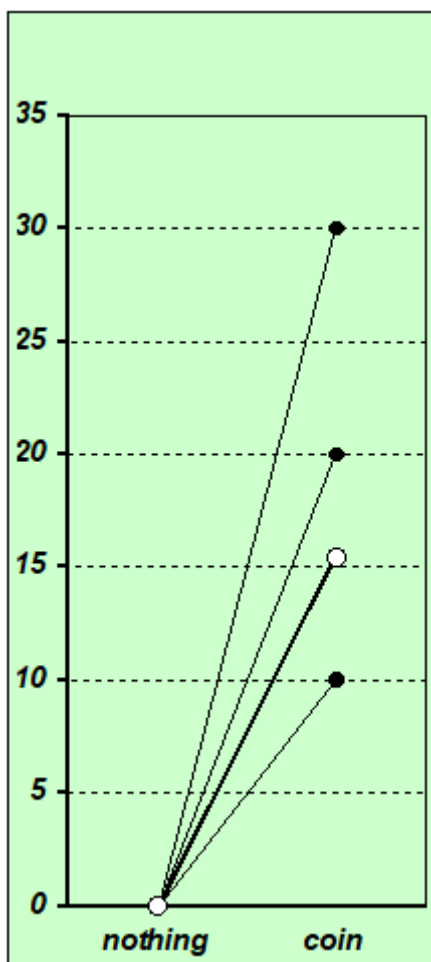
腕時計の結果 : P 値 0.0026 (危険率 5%)

SBP	nothing	watch
n=1	0	20
n=2	0	30
n=3	0	20
n=4	0	10
n=5	0	10
n=6	0	0
n=7	0	30
n=8	0	10
n=9	0	10
n=10	0	30
n=11	0	10



硬貨の結果 : P 値 0.0017 (危険率 5%)

SBP	nothing	coin
n=1	0	10
n=2	0	10
n=3	0	10
n=4	0	30
n=5	0	10
n=6	0	10
n=7	0	10
n=8	0	20
n=9	0	30
n=10	0	10
n=11	0	20



< 考察 >

各々の実験の結果、腕時計が危険率 5%で有意差あり、硬貨が危険率 5%で有意差あり。傾聴が腕時計や硬貨そのものへ引かれるほどではなくても、臨床において傾聴を実施した際に誤った方向へ導いてしまうことは証明された。

臨床において傾聴を使用し続けていくためには、講義で例として挙げた、腕時計、硬貨、ネックレス、ピアス、ベルトなどのほかにも身体に影響を及ぼしそうなものを見つけて、それを考慮して、臨床に臨むべきである。

また、本研究をさらに進めていくためには、より多くのサンプル数が必要となるだけでなく、以下の事項も考慮に入れたいと思っている。

- ・コントロール群の設定
- ・腕時計、硬貨を身に着けるなどをしたうえで傾聴で引かれた場所に実際に体性機能障害があるのかどうかの確認
- ・実験に木片など身体に影響を及ぼしそうにないものも含める
- ・モデルの体性機能障害の有無
- ・室内、屋外、天候などの外的条件の影響
- ・コントロール群を設定した場合のマンホイットニー検定を追加するなどの統計方法の改善

< 結論 >

本研究において、傾聴は何か物を所持していても影響は受けないという帰無仮説は棄却された。つまり、統計方法の設定の課題もあるが、明らかに実験前後の傾聴で引かれる方向が変化している。よって実験結果から対立仮説（：傾聴は所持している物の影響を受ける）は採択された。従って、本研究から、身体に特定のを身に着けていると傾聴の結果が本来導かれる方向と変化する可能性があることが証明された。

< 謝辞 >

本研究、および卒業論文執筆において多くの方にご協力をいただきました。

卒業論文執筆をご指導いただきました平塚佳輝学長、早川敏之先生、江熊省吾先生、佐藤鉄也先生に深く感謝致します。

また、本研究の被験者を引き受けてくださった諸先生方、JCO 学生の皆様に深く感謝致します。

< 参考文献 >

- ・ジャン・ピエール・バラル、ピエール・メルシェー著
内臓マニピュレーション、日本オステオパシー学会
- ・ジャン・ピエール・バラル、ピエール・メルシェー著
内臓マニピュレーションⅡ、日本オステオパシー学会
- ・ロバート・C・フルフォード、ジーン・ストーン著
いのちの輝き、翔泳社
- ・エリック・U・ヘブゲン著
オステオパシーの内臓マニピュレーション、ガイアブックス
- ・アメリカ・オステオパシー協会編
オステオパシー総覧（下）、エンタプライズ
- ・山崎信也著
なるほど統計学とおどろき Excel 統計処理 改訂第6版
医学図書出版株式会社、付属 CD-ROM

< 付録 >

・同意書

1、研究題目

「傾聴の行方」

2、研究目的

本研究は2018年度JCO卒業論文として、オステオパシーの傾聴テクニックを行う上での注意事項の真偽を確かめることを目的とする。

3、本研究の参加基準

- ・ 施術において傾聴を使用したことがある者
- ・ 講義にて傾聴を習得した者

4、研究方法及び進行

①本同意書を熟読し、ご理解の上必要事項を記入する

②起立位のモデルの頭頂部及び胸腰移行部辺りに手を当て、傾聴をしてもらい、どこに引かれるかを伝えてもらう。

③モデルの身体のどこかに時計をつけた状態になり、②と同様に傾聴をしてもらい、再度どこに引かれるかを伝えてもらう。

④モデルの身体のどこかに小銭を持っている状態になり、②と同様に傾聴をしてもらい、再度どこに引かれるかを伝えてもらう。

5、本研究の参加、及び離脱

本研究への参加は被験者の自由意思によるものとする。また研究同意後においても、被験者はその理由を述べることなく本研究から自由に離脱する権利を有する。

6、個人情報の取り扱い

外部に公表されるのは観測データのみであり、被験者指名等の個人が特定されうる個人情報は外部には一切漏れないよう厳重に管理するものとする。

平成 31 年 月 日 被験者氏名_____